

第82回 大航海時代①

1 大航海時代の背景

- ・ヨーロッパは、15世紀後半以降からいわゆる近世ヨーロッパに入った。
→15世紀後半からの（ ）には、世界各地に進出していった。

- (1) 大航海時代の中心的な国であった、（ ）と（ ）は、レコンキスタの延長として対外進出に意欲的であり、探検や航海を援助した。
- (2) この頃ヨーロッパでは、胡椒など（ ）の需要が増大していたが、インドや東南アジアからオスマン帝国を経由して輸入されたため、非常に高価だった。
→（ ）が東方貿易（レヴァント貿易）により輸入していた。
- (3) （ ）の『 』などの影響により、黄金の国（ ）など東方の富への関心が高まっていた。
- (4) （ ）の地球球体説、羅針盤の改良、快速帆船の普及、航海技術の進歩などにより、遠洋航海ができるようになっていた。
- (5) 当時のヨーロッパでは、東方に「プレスター=ジョンの国」というキリスト教の国があって、イスラーム諸国を挟み撃ちできるという伝説が信じられていた。



マルコ=ポーロ

13世紀にヴェネツィア共和国で生まれ、父に従って元に行った。ジェノヴァとの戦争で捕虜となったとき、獄中で見聞録を口述筆記した。



トスカネリ

フィレンツェの学者で、地球球体説を唱えた。ただし地球が丸いという考えは、彼が最初に出したわけではない。古代ギリシアでは常識だった。



当時の地球儀

マルティン=ベハイムという人が作った、現存する最古の地球儀。ヨーロッパはともかく、アジアはかなり適当である。

2 ポルトガルとインド航路の開拓

- ・ポルトガルは、アフリカを周り（ ）の開拓を考えた。
→15世紀前半、（ ）の支援により、大きな成果をあげた。

- ・1415年、ジブラルタル海峡を渡って対岸のセウタを攻略し、アフリカへ進出した。
→1431年に大西洋上にあるアゾレス諸島、1445年にはアフリカ大陸最西端のヴェルデ岬に進出した。
- ・エンリケの死後、国王の（ ）が援助を継続した。
→1488年、（ ）は、アフリカ大陸の南端に達し、ジョアン2世はその岬を（ ）と命名した。



エンリケ航海王子

探検に膨大な資金をつぎ込んだが、その動機については謎が多くよくわからない。船酔いが激しく、彼自身は一度も航海しなかった。



バルトロメウ=ディアス

南端に到達したときのバルトロメウ=ディアス。彼は最初「嵐の岬」と名づけたが、縁起が悪いということで、ジョアン2世が改名した。



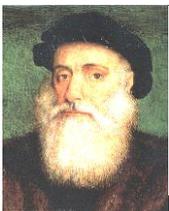
喜望峰

実は最南端ではない。なお日本で「喜望峰」というのは、「希望峰」を誤植したものが、定着してしまったらしい。

3 ポルトガルのインド・東南アジア進出

- 1498 年、() は、アフリカ東岸のマリンディでムスリムの案内人を雇い、ついにインド西南岸の() へと達した。
→これにより初めてヨーロッパから直接インドに至る、インド航路が開かれた。

- しかしアジアでは、すでにムスリム商人や中国商人が交易ネットワークを築いており、貧弱な商品しかないポルトガルはこの交易に加わることが難しかった。
→1509 年、ポルトガルは、ディウ沖海戦でマムルーク朝を破った。
→1510 年、ポルトガル人のアルブケルケは、強引にインドの() を占領し、総督府を置いてアジア貿易の拠点とした。
- またインド東南部の島である() の支配もかためた。
- さらに東南アジアへ進出し、1511 年に() を占領して拠点とした後、香辛料の産地() をも占領した。



ヴァスコ=ダ=ガマ

インドへの航海は、非常に苦しいものであった。170 名の船員のうち、生きて帰れたのは 55 人にすぎなかった。



ゴア

アルブケルケが初代総督となった。ゴアは現在インド領だが、長らくポルトガル領だったため、ポルトガル時代の建築物が多く残る。写真は大聖堂。



リスボン

16 世紀には、スペインのセビリヤと並び、世界経済の中心であった。坂の多い町として知られる。現在もポルトガルの首都。

4 ポルトガルの海上交易帝国

- 東アジアでは、1557 年、中国の都市() における居住権を獲得して、中国(当時は明)との交易の拠点とした。

- 東アジアに進出したポルトガルは、1543 年、() に漂着し、日本に() をもたらしたとされる。
→1550 年以降、() や長崎を拠点にして、日本との貿易を行った。
- 都の() は世界商業の中心となり、香辛料、絹などの取引で栄えた。

